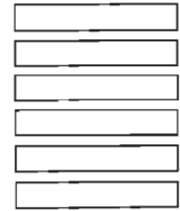


周易上経



乾けん
（乾けん 為い 天てん）

君子の道

乾。元亨。利貞。

乾は、元もといに亨とよる。貞まことしきに利あり。

六十四卦の最初にこの卦があって、次ぎに坤こんの卦が置かれるのは、乾卦が天を、坤卦が大地を示すからです。理由は、天地は万物のもとだからです。序卦じょか伝に「天地があつて、そののちに万物が生じた」とあります。

乾卦の乾は、音の似ている健けんの意味です。健とは、すこやかなことで、妨害されないとか、妨害にあわない、希望したようにやれる、などのことをいいます。

世の中を構成しているのは陰と陽という二つのもので、これを二元といいます。陽は健の創造的とか活動的というものを本質とします。その陽気が形となったものとも大きなものは天ですから、陽の記号一だけを三本重ねて、三を乾と名づけ、天にあてました。

陽爻を三本重ねた乾三卦を上下に重ねると、さらに複雑な万物の変化を示しますが、上も下も乾です。これは最も純粋な陽、最高に健であるものを象徴するので、六画になっても乾といえます。次に、乾は、元もといに亨とよる。貞まことしきに利あり、という辞ことばを「卦辞かじ」といい、これは乾卦を象徴するこ

とばであって、そのまま判断を示します。だから、字の意味がわからないと判断がまともなりません。さて、卦辞の解釈です。元は大、大いにの意味で、亨は通、成功する、希望は通る。貞は正しい上に持続的、正しいこと、常識的なことをいつまでもつづける。利は利という意味です。そこでこれをつづけますと、問う人の希望は大いに通るであろう。ただ、問う人の動機が正しくて、その正しさがいつまでも続くことをもって条件とする。つまり持続するということが大切なので、たとえ動機は正しくても、その正しさが持続されないようでは終りが全うされないのである。という占断になります。占断とは、判断からまとめあげた最終的な答です。

この解釈を毎日の生活のなかで考えると、A校を目指している受験生がA校受験の結果を占ったとします。占断は「受験の動機は正しいし、今後とも大いに学習をつづけるならば見込みがある」となります。

また、今年一年の運勢を占ったら「毎日の生活を少しでも飛躍させたいという動機は正しい。だから一年を通して大いにがんばったらいいい結果を得る」です。

ただ受験にしても年運判断でも、これだけではびったりしたところがありません。そこで、もう一つ突っ込んだ判断をする材料に、爻辞ちうじがあります。

この乾卦は、卦辞の次にいきなり爻辞がついていますが、次の坤卦も同じです。そしてこの六十二卦のスタイルは「卦辞・彖伝たうでん・象伝しやうでん・爻辞・小象しょうしやう」の順に書かれています。

初九。潛龍。勿用。

初九は、潜竜^{せんりゅう}なり。用^{もち}うるなかれ。

最初の、つまり一番下の陽爻に附いている判断のことばで、これを爻辞といいます。

さて中国では、竜は神秘的なめでたい動物とされています。竜は地にひそみ、天にのぼり、雨をふらす能力があるので、雨乞いの祭の対象にもなり、このような竜の変幻不可思議な性格から、天道（世の中の流れ）の変化、陽氣（四季）の消長、それから聖人（英雄とか王などの意）の進退に象^{かた}どったといえます。

この竜の活動的な男性的性格から考えると、陰陽のうちでは陽に属します。しかしこの爻は陽ではあっても、いまは一番下の地位にあり、これは陽氣が地下に萌え始めたばかりの時で、まだ外へ出て思うように活動できない時、と考えます。

そこでこの地位の象徴として「潜竜」といいます。潜とは地中にひそむ意味で、地中にひそむ竜、まだ時期が来ないのでじっとしているしか方法のない竜、タイミングが合わないから動けない竜と考えます。その占断として「用うるなかれ」といい、用うとは、はたらくとか、行動する意味だから、行動しないこと、はたらかけないことの意味です。

ここで前に戻って、受験を占ったときに、乾初九を得たなら、占断は「動機は正しいし、今後とも大いに学習をつづけるとしても、力不足（行動する対象との間に差があり過ぎる）であって合格はむづかしい」とします。

また、運勢を占って乾初九を得たら「なにかここでやろうとすることは、タイミングがよくないとか、いまはじっとして時を待つこと、または、自分ではいいと思っている時だが、思ったほど恵まれ

ない」といった占断をします。

「いまは順調だが、思いがけない翳りの出るとき」という占断はしません。乾初九でこういう判断をするのを「卦象判断」といって乾☰☰を完全とか順調ときめつけて、初九による之卦の天風姤☵☴の一陰だけをわろくみます。このやり方に頼っていると、占断が単調になって自信を喪います。

本卦・最初に得た卦をいいます。

之卦・爻変によって生じる卦をいいます。

たとえば、最初八払いして一本残り、次に八払いして一本残り、次に六払いして一本残って得た卦は「乾初九」で、これを得卦、または本卦といっています。

爻とは、交わる、変化するの意味ですから乾☰☰初爻変は陽爻が陰爻に変わる、または陽爻が陰爻と交わるので、☰☳上記の卦象になります。これを本卦☰☰から姤☵☴☴卦に之^ゆくといつて、それを之卦^{しか}といっています。

九二。見龍在田。利見大人。

九二は、見竜^{けんりゅう}田^{でん}にあり、大人^{たいてん}を見るに利^りあり。

第二の爻辞です。この位^{くらい}は内卦の中央にあつて、いわゆる「中」を得たよい地位です。そのため平均的にことばもめでたい。二は偶数で、陰の数です。だから陰の位です。陰の位に陽爻がいることは、

位を得ていない、不正なわけです。しかし乾と坤の二卦だけは爻が位を得ているとか、いないとかの正不正を問題にしません。これは乾・坤両卦は天地を表徴するので、天と地のなかに改めて位を設ける必要がないという考えからでしょう。

次に、五の位の陽爻に対して、普通なら二は陰爻--であって始めて応じることができます（応爻の項を参照のこと）。しかし乾卦の場合、二は陽爻のまま九五に応じることができると考えます。これは二も五も陽同士でいて互に役に立つという意味になります。

見竜の見は、現と同じで、あらわれる意味。地中に潜んでいた竜がいまや地上にあらわれた。そして陽爻だから剛毅ゴウキで少しのことではへこたれない。しかも二の位にいるから中庸の徳をそなえている。信念を持ち、目標に向かい、しかも道はずれないほどのよさがあるの意味です。

この竜のような人が隠れ家からあらわれて、大衆の前に姿を現わしたのです。ごく自然にその徳の恩恵は天下にひろまるであろうし、天下の人はこの人と会見することで利益となるでしょう。

九二は九五とちがって、まだ支配者としての地位を得てはいないけれど、徳はたらきも位も偉大な大人としての貫禄はすでに現われているので、常人や普通の人をそのまま大人に当てはめるわけにはいきません。だから、占って九二を得た場合は、このような大人、それもまだ位を得ない大人に会えるだろう、というのとどまります。ただし、占う人に見竜のような徳がある場合には、九五の天子の位にある大人に会うことが利益となるであろうとなります。

まず、内卦の中を得たというのは、条件的にすぐれている、恵まれている、と考えます。だから竜が地上にあらわれたのは、たくさんの方の目にふれることで、たとえば竜がどのようにに美事でも、人目

にふれるチャンスがなくては話題になりません。九二は、時を得た竜が人目にふれたわけですから、これは世間に出るきっかけをつかんだ、という占断になります。

就職の方針、どのようにしたら就職できるかを占って、たとえばA社について乾九二を得たら「十分な実力があるなら、試験を受けてもよい。実力がなければここをやめて他を受けることがいい」になります。これは、見竜に相当する受験生が少ないためで、たとえば入学試験なども補欠のことが多いもの。試験場で緊張しすぎて、実力を出し切れない、とみます。

爻辞判断は、爻辞のもつ意味を理解するほどよろしい。見竜とは、田とは、大人とは、これらの辞（ことば）が、占った事のなかに当たるかを考えて、判断を引き出します。

運勢を占って乾九二を得たら「やっと認められるようなチャンスを得そう。これまでやってきた努力が実力として実を結びそう」といった考え方をします。

九三。君子終日乾乾。夕惕若。厲无咎。

九三は、君子終日乾乾、夕（ゆふ）まで惕（おそ）若（ごと）たり。厲（あや）けれど咎（とが）なし。

乾々は健々と同じでより努力をする。惕は憂える。若は然と同じで、これを下につけて形容詞とします。

三は奇数だから陽の位であり、九は陽爻だからここは陽剛の要素が重なっています。そして内卦の中をはずれている。しかも三の位は内卦を一番上に昇りつめたところで、外卦との接点です。

これを人事にたとえると、働き盛りの（陽爻）課長（三の位）といったところで、いまのやり方次

第では部長、重役となれそうだから、大いに張り切っている。ここに陽剛の要素の重なった象^{かたち}があります。

課長から部長への道は非常に険しく、それだけに危険な地位です。しかし君子（徳^{はたらき}をもった人）はもともとの性質が剛健ですから、一日中自己の発展する努力をつづけて、夜になってもなお過失がありません。これはしなかったかと恐れます。このように注意深くやるならば、たとえ前記のような危険な地位にいても失敗を免れることが可能でしょう。君子とは占う人自身のことをいいます。

君子などということには、大上段にふりかぶったイメージがありますが、本当の君子は、よくものの事を考え、過失の少ない行動をしようとする人です。その背景にある思想といえますか、根本的なものの考え方は、人に迷惑をかけない、というものです。対人関係は親子、兄弟、夫婦、社会とひろがりますが、これらのどの人たちにも迷惑をかけないようにするのが君子の道です。

親に心配をかけない、兄弟を当てにしない、夫または妻に悲しい思いをさせない、そして社会的にはルールを守るわけです。また健康に注意することも君子の道です。だから、君子とは特別の人ではなく、ごくふつうの一般的常識人をさします。

それだけに自分の行動については慎重です。そこで十分に考えた道について易に問うのであって、思いつきとか、人におだてられて飛びつく人は、君子ではありません。

その君子が、一日一日という毎日を努力に努力を重ね、なお一日が終るごとに今日の行動に過失^{ミヌ}がなかったかと恐れる、気をつけます。このようだから、あれこれと危険なことがあっても、あるいは危険の多い立場にあっても失敗しなすすみません。

運勢を占って乾九三は「氣をゆるめないことが大切なときであり、慎重に努力していけば大過はなく、手を抜くと抜いただけの問題の出るとき」などと占断をします。

出産を占って九三を得て「すぐにも生まれそうだが、結局は夕方になるだろう。だからご主人は仕事に行っても心配ない」と占断。私の若い時のものですが、夜七時頃生まれています。天氣の占に九三は「なんとか夕方までもつ。夜小雨」が正解です。天氣は季節による判断を加えるので、時間的なズレの出ることはあります。

九四。或躍在淵。无咎。

九四は、或いは躍りて淵にあり。咎なし。

或は、疑惑の意味で、疑うところがあつてまだはつきりしない状態の意味。同意の惑と似た意味です。躍は、飛ぶというほどの強さはないけれど、足が地を離れた状態。淵は、上は天空につづき、下は洞穴で、底知れぬ深みをもつものの意味。

さて九四は、竜が、空へ向かつて飛ぼうか飛ぶまいか、決心がつかないままに、洞のなかで跳びあがったり、やめたりしています。四の位に淵という表象を用いるのは、九二の田より低いように思いがちだけれど、跳びあがればそのまま天に向かうことが可能という点で、田より上に置かれています。

九四は、陽爻でいて偶数の陰の位にいてこれは位を得ていない不正な爻なので、条件的に安定感を欠くふくみです。また、四の位は内卦を離れて、外卦の一番下の位ですから、ここには三の位ほどでないとしても、変化というふくみは十分にあり、それだから、当時者としては進退をきめかねる意味

があつて、そこで、その表象に、行きつもどりつする竜を用いました。

占断としては、タイミングをよりよく考えたうえで進退するなら、咎はない、となります。咎は人と各とを合わせた字で、各は違^{ちが}うであり、人が福と相い離れる意味になるから、災^{わざ}いを暗示します。

九四は、臥薪嘗胆に近い状態からこれまでがあれこれと苦労があつたのが、ここで目標もきまり、目的に向かつて行動するようときに得ます。たとえば落選中の元代議士の運勢、あるいは闘病生活から立ちあがつた人、前年は会社整理に追われて苦労したが、ここで身軽になつたという人などです。ごく、ふつうの一般的状态の人に得たら、用心しながら野心を満たしたいときで、脱サラとか、仕事を交^かえたい、といった動機をふくんでいます。

たとえば病気が早くよくなるようにの占^うに得たら「ここから悪くなることはない。ただ、寸退尺進、少し心配なところがあつても、より以上に回復する見込みが多い」と占断します。永い春といった恋愛関係の将来の占に得たら「お互い努力はしていますが、踏み切るエネルギーが不足しているから、チャンスをつかまえて行動することがいい」となります。また、結婚の方針、つまりいまある話の方針の占なら「もっと相手を確めよ」であり、結婚するにはどんな方針がいいかの占なら「結婚したい意志表示をはっきりさせること。世話好きの人によく頼むこと、一度や二度であきらめてしまわないこと」などです。

九五。飛龍在天。利見大人。

九五は、飛竜^{ひりゅう}天にあり、大人を見るに利あり。

五の位は外卦の「中」です。そして奇数だから陽の位で、そこに陽爻がいるのは位を得ている、いわゆる正の状態です。これを「中正」の爻といいます。内卦にも同じように中正の爻はあって、その場合は二の位に陰爻がいることが条件です。

九五のような中正の爻は、条件的に非常に恵まれているわけで、そのために爻辞も乾卦のうちで最もめでたい。そこで、竜が時とところを得て、天空を飛ぶ姿を表象として用います。これを人間でいえば、功成り名遂げた姿ですが、それに剛健中正の聖人の徳のある人という条件がついて、その人が聖人の位、つまり天子の位に昇るような場面をいいます。

日本には革命がなかったので、天子は万世一系と表現されますが、中国では、徳のないものは去る、いわゆる革命が認められているので、世の中が悪くなると、天子が天子らしくないときは、その天子に代る聖人、つまり英雄が出て、大いに努力奔走します。その結果として「飛竜在天」の象（かち）を手にすることができるので、こうした事情や歴史を理解しておかないと、意味の通じにくい点があります。

ここで解釈は二通りにわかれて、一つは努力の結果として手に入る地位をいい、もう一つは、この聖人、英雄の恩沢は万民にゆきとどくであろう、といえます。つまり、国家を満足に統治できないそれまでの君主に代って、新しい英雄となった人、いわゆる聖人といわれる人は、それまでの乱世を泰平の世に治めるだけの力をもつから、万民は戦乱の塗炭の苦しみから逃れることができます。この状態を「英雄の恩沢は万民にゆきとどくであろう」といいます。判断として「大人を見るに利あり」といいますが、ここは九二の例と同じように、占う人自身をこの大人に当てるわけにはゆかないから、占う側からいえば、この最高の地位についた聖人に会うことができるだろう、という意味になります。

ただし特別のケースとして、天子の位にある人が占って、九五を得た場合は、九二に当たる、自分の手足ともなるべき実力のある人を手に入れることが可能である、という考え方をします。

竜は千変万化するもの、しかもおめでたいイメージをもっていますが、その竜が初九では地中にひそんでいた、九二はやっと地上に現われた、九三は大いに努力をする竜、九四は自信がないから反転している竜で、どの爻にも癖があります。五爻になって、やっと竜としては所を得ました。つまり、天空に高く浮かんで、巨大な雄姿が万民の熱い視線を浴びます。これこそ竜としての本望でしょう。それだけに一般人の運勢などに得ても、びったりするものがなく、こういうのを「卦爻が占的に応じていない」といいます。

たとえば、乾九五を得ておかしくない人といえ、天皇とか、大統領、書記長といった一国を代表する立場にある人で、そうした場合は「占的に卦爻が応じている」といいます。つまり、占的に対して、卦や爻が応じていたら、占断は当然のように的中率が高くなります。しかし、占的に対して得た卦や爻が応じない、不自然である、びったりしない場合は、占断に苦しみます。そして、苦しんで考えて出した占断は、だいたいが当たらないものです。これまでに運勢を占って乾九五を得たのはただ一回で、その依頼者は大臣を経験した落選議員でした。当時の判断は「過去に、人から頼りにされた人らしいが、現在は浪人であり、今年中に認められるような仕事をするので、来年までには希望が通るであろう」というものです。次の選挙では当選して、その後、身分をあかしてくれて、それから今日までつき合っていますが、易とは不思議なものだと思っています。

また、出産の占に得たことがあって、いま臨月ではないか、産期はのびるし、少し産は重いという

占断をしたら、案の状、わりと重く、予定日を十五日近くも過ぎてからのお産でした。これは乾三三卦を陽爻だけのものとも充実した卦とみます。するとお腹がいっぱいに大きくなったのとイコールです。世の中のこととはすべて陰陽の関係で成り立っているのに、陽ばかりの乾卦は、一方通行的な危険さをもふくんでいるので、これから産を重いとみます。そして、九五は竜が天空に浮かんた象ですから、すぐ降りてくる様子はないので、その考えから産期はのびるとみるわけです。胎児は男が一般的です。これは陽爻を男とみるからで、それに内卦三や外卦三は陽卦だから、ここにも男の象があります。

運勢の占の平均的占断は、いまが最高るときだから、この状態をつづける努力が必要とか、食べるには困らないが、それ相当の仕事がないとか、栄転などのいい面もふくんでいます。

上九。亢龍。有悔。

上九は、亢竜^{かうりゅう}なり。悔^{くゐ}あり。

上爻は一番上の爻です。これは極度に高い地位で会社でいえば代表権のない会長とか、相談役です。だから高過ぎるという点から、五の位よりかえって悪くいます。亢は、昇りすぎて降りられない意味。乾卦は、初から上までの全爻が陽で、だから剛です。それが五の位では位のもつ暗示と剛の力が、バランスを得ていました。それが上の位になるとまさに剛の極端です。この上の位は偶数だから陰です。そこへ剛の極端なものがあることは、剛の行きすぎで、そのため過大なエネルギーの重味に耐えかねる状態です。つまり、むりを重ねてきた結果から、これ以上に行動することは必ず後悔するよう

な問題になると考えます。

たとえば天に昇った竜が昇りつめて、降りようにも降りられないようなものです。上九を得たら、欲張ることは禁物、欲望を押えるように戒めることです。進みすぎて、それが原因でだんだんに悪くなります。

健康運に乾上九を得たら、過信から働きすぎて、それが原因で健康をそこねるといえます。

学業運に上九を得たら「勉強のやりすぎとはみないで、やれば出来ると自惚れて遊んでいて、結局は時間が不足して困ることになる」という占断です。上九は、もの事の方針、つまりどうするべきか、どうしたらいいか、といった占的に得ることが多いものです。占断は「のめり込みに注意、無中にならないように、あるいは熱中しすぎているから問題が出そう」などといえます。

彖曰。大哉乾元。萬物資始。乃統天。雲行雨施。品物流形。大明終始。六位時成。時乘六龍以御天。乾道變化。各正性命。保合大和。乃利貞。首出庶物。萬國咸寧。

彖に曰く、大いなるかな乾元、万物資りて始む。乃ち天を統ぶ。雲行き雨施し、品物流く。大いに終始を明らかにすれば、六位時に成る。時に六竜に乗って以て天を御す。乾道変化して、各々性命を正し、大和を保合す。乃ち利貞なり。首として庶物に出でて、万国ことごとく寧し。

彖伝は孔子の作といえます。ここでは乾の卦辞の「乾。元亨。利貞。」を解釈するわけですが。それには乾のもつ意味を天の道という表現で説明します。その上、元亨利貞の四字をばらばらにして、四つの徳として解説を展開します。